第798号 平成23年11月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日　第三種郵便物認可

2011年（平成23年）
11月号（No. 798）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部　150円
会員の会報購読料は年会費に含まれています
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp

新入会員たちの入会動機と抱負

今年、181名の方たちが日本山岳会に入会、新しく仲間に加わった。そのなかから特に若い会員7人に、入会の動機と山岳会に期待することなどを綴ってもらった。彼らの声に真摯に耳を傾け、温かく迎え入れていただきたい。

「滑り」から「登り」の山へ

菊地信宏

20歳のころから、スノーボードにはまり、ボーダークロスという競技にも真剣に取り組み、トレーニングもしてきました。冬は、日本でスキー場のアルバイトをしながら滑り、夏はニュージーランド、スイス、アメリカ・オレゴンに長期滞在してまた滑る……。山は、「滑る」ものだと思っていました。ずっとこんな生活ができるんじゃないかと思っていました。

27歳でケガでぱったり滑ることを止めていましたが、昔の仲間に誘われ、そこで新しく知り合った友人に登山に誘われました。最初の山は瑞牆山でした。悪天候で途中から雨。山頂はガスって何も見えない。そんななかでも登っていると、自分自身と向き合える不思議な感覚を体験しました。自分のなかに何か見えた気がしたのです。2009年5月のことでした。

その年、筑波山で出会った老夫婦に北アルプスの話を聞かされ、雪山も登ってみたいと思いました。滑るんじゃなくて「登る」のです。また誘われるがまま、JACの雪山講習（2月雲取山、4月鳳凰三山）に参加。ワークマンの雨具で少し寒かったが、恵まれた天気とそこから見えるめちゃくちゃ美しい富士山、僕のしつこい質問にも熱心に答えてくれるスタッフ。「山はいいなぁ～、山は美しい～」と本気で思いました。自分の足で登ったからこその感情です。

登山歴2年、山行経歴は知れていますが、去年12月の聖岳と今年3月の北岳は自信につながりました。JACで知り合った大島氏に去年8月、念願の「北アルプステント縦走デビュー」をさせてもらいました。魔法の言葉にダマされ（励まされ）、みごと歩ききれました。

あれから1年後、僕らは毎週のように攀じ登っています。そして今月、エベレスト・トレッキングに行きます。いつかJACの仲間

2010年、立山で

目　次

新入会員たちの入会動機と抱負 ‥ 1
ワルテル・ボナッティを偲ぶ‥ 5
『北八ツ彷徨』の山口耀久さんと八ヶ岳 ‥ 6
東日本大震災の義援金を被災会員、支部へ ‥ 7
ディディたちのマナスル‥‥‥ 8
一期一会・山と人──第20代会長　大塚博美氏‥ 9
活動報告‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 10
　資料映像委員会／総務委員会／集会委員会
図書紹介‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 12
支部だより‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 14
　北海道支部
会務報告‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 15
ルーム日誌‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 17
会員異動‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 17
新入会員‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 17
図書受入報告‥‥‥‥‥‥‥‥ 17
INFORMATION ‥‥‥‥‥‥ 18
大学山岳部の復活奮闘記⑤‥‥ 19

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月・火・木‥‥‥‥‥‥‥10～20時
水・金‥‥‥‥‥‥‥‥‥13～20時
第2、第4土曜日‥‥‥‥‥‥閉室
第1、第3、第5土曜日‥‥10～18時
年末年始休室　12月29日～1月5日

で先輩方のように初登ルートを登れたらいいな……。

どんなスタイルになるにせよ、「山」と「山仲間」とは、これからもまじめに楽しくつき合っていきたいと思います。

独学では危険な岩登りや沢登りへ

大島 崇

私は4年前まで山に全然興味がありませんでした。それが恩師に誘われ、断れずについて行った高尾山のすがすがしさから、山の魅力に取りつかれてしまいました。

その後2年間は高尾山近辺から始まり、奥多摩、丹沢、大菩薩、両神山、谷川岳など毎週末、日帰りで出かけていましたが、それだけでは飽き足らずテントを購入して日本アルプスに行くようになりました。そして雪山にも挑戦したくなりました。そんな時に「雪山講習会を見つけたんだけど一緒に行かないか」と友人に誘われて参加したのがJACとの出会いです。

その後岩登り講習会、沢登り講習会に参加しました。雪山もそうですが、それらは独学でやっていくのは危険だと思ったからです。そして友人ができ、スタッフの方々とも親しくなったので皆で入会し、青年部で活動することになりました。今はみんなで夏山・雪山縦走、沢登り、岩登りを楽しんでいます。この冬からはスキーも頑張りたいと思っています。

2011年7月、ジャンダルムで

山岳会に入ったからにはいろいろ教わり、実践してバリエーションルートなど難しいことにどんどんチャレンジしていきたいです。そしていつかは教わったことを後から入ってきた人に教えられるようになりたいと思います。皆で安全に、楽しく、末永く登り続けたいと思います。

山の領域が格段に増えました

田沼久美子

私が山に興味を持ち、同時にJACの存在を知るきっかけとなったのは、2年ほど前に見た映画『劔岳　点の記』でした。その時JACは、私にとってまだ馴染みの薄い、山に精通したごく限られた人だけが活動している会だと思っていました。でも、映画館のスクリーンいっぱいに広がった立山の映像を見て、自分の目でこの風景を見てみたいと思い、その年の9月に立山へ行きました。天気に恵まれ、期待以上の美しい風景を眺め、ここに今自分がいることに、ただただ感謝ばかりしていたのをよく覚えています。

こんな素晴らしい景色を、もっと多くの山に登って見てみたいと思い、それ以来自分で行きたい山を選び計画し、休みがくるたびにその山へ行くことを繰り返してきました。自分の好きな時に好きな山を登れるという自由さと、静かで雄大な山の世界に溶け込んでいるような気分に浸れるのが好きで、山へ行くのはだいたいいつも1人でした。季節を問わず楽しみたいので、そのうち雪山にも行きたいと思うようになってきましたが、そのためには技術、知識、経験ともに充分に積んでおく必要性を感じていました。

しっかりした知識と技術が学べる雪山講習会をインターネットで調べて、「これだ！」と見つけたのがJAC-YOUTHが主催する講習会でした。岩根山荘でのアイスクライミング、金峰山登頂、八ヶ岳硫黄岳登頂、六百山登山などを通して、ほかの参加者やスタッフの方々と山で一緒に過ごすうちに、雪山の登り方だけではなく、単独行ではわからなかった、仲間がいるという心強さとか、山の経験や山に対する思いを共有できる楽しさを知り、この夏正式に入会を決めました。入会からまだ半年も経っていませんが、沢登りや岩

今年9月の穂高・槍縦走の時、槍ヶ岳の頂上で

登りへ行ったりと、山を楽しむ領域が増え、山のなかでは非常に濃い毎日を送れているなと実感しています。

今後もさらに先輩方や仲間の皆さんとともに歩行技術や登攀技術を高め、読図や天気の把握の仕方、山での生活の仕方など、登山における総合的な技術や知識を養い、もっと多くの山を楽しみたいと思っています。

そして、長い歴史をもち、昔から培われてきた知識や技術を蓄えているＪＡＣには、山の生態系が抱える豊かな自然の恵みに感謝しながら、それをうまく、かつ大いに活用して、良い意味で「原始的に」山に触れ合う術をご教授していただきたく期待しています。

8年のブランクを超えて

古城海太

山登りは学生時代に始めましたが、卒業後に山から足が遠のいて8年ほど経ち、昨年、思いがけなく先輩から声をかけてもらったというのが、消極的ではありますがＪＡＣ入会のきっかけです。そしてこれだけの大所帯、どうやら入会しただけでは不十分らしく、比較的自分に近い志向の青年部の存在を教えてもらい、現在、お世話になっています。

昨年の夏の小川山岩登り講習を皮切りに、関東近辺の沢登り、立山での雪上訓練など、ガイド・スタッフの方たちから懇切丁寧に指導してもらった結果、8年のブランクは埋められつつあり、徐々にですが、確実にステップアップしていく自分（たち）が実感できるというのは大変うれしいことです。また、経験豊富な人の話に耳を傾けたり、山小屋を拠点とした縦走やスキー、のんびりとキャンプやハイキングに興じたりと、さまざまな楽しみ方があることを実感できたのも大きな収穫です。

2010年夏、常念岳頂上で

今後、心・技・体が充実してくれば、未経験の海外登山にも挑戦してみたいと思っています。ＪＡＣには過去の海外登山の実績やノウハウなど学ぶべき事例は山ほどあるので非常に心強く思います。

もちろん、一方的に技術や知識を受け取るだけでなく、初心者の方にも自分の持てるものをきちんと還元していくことが大切なのは言うまでもありません。

今はまだ「道遠し」ですが、以上のような姿勢で取り組んでいきたいと考えていますので、皆さまご指導をよろしくお願いします。

救急医療の現場でも「山」をいかしたいです

佐々木亮

学生のころ、バックパッカーとして何気なく訪れたポカラ（ネパール）。そこから見たマチャプチャレをはじめとしたアンナプルナ山群の圧倒的な存在感に惹きつけられるように、充分な知識と装備もないのに山歩きをしました。不思議と山で生活する人々や山を楽しむ人々の雰囲気のなかにいることが楽しかったです。それから日本の山さえもよく知らないのに、ヒマラヤ、チベット、キリマンジャロ、アルプスと海外の有名な山へ、勢いにまかせて貧乏旅行で訪れました。思い返してみると、ＪＡＣへ誘われた際にためらいなく入会を決めたのは、そのころの体験があったと思います。

現在、東京のとあるＥＲ／救命救急センターで働いている私は、日夜、追われる毎日を送っています。救急というと、「切った張った」の修羅場のイメージが強いですが、現実は軽症が6割弱を占め、運ばれてくるのは老若男女、多種多様の病気やケガの患者さんです。また、救急車で搬送されてくる方のなかには独居高齢者など、なんらかの社会的背景を持っている人も多く、単純に「病気」だけを直せば

2011年10月、職場の病院で

よいということでもありません。難しい手術を行なうことを、より困難なバリエーションルートや尖鋭的な登攀に挑むことに例えるならば、救急医療は山に関するさまざまなことに精通し、対応することにもつながると思います。

歴史と伝統あるＪＡＣに入会させていただいたので、山を登る、山を楽しむという行為だけではなく、自分の原点でもある山で生活する人や山を楽しむ人の医療や健康面での支えにもなるような活動をしていきたいと思っています。

山の知識を増やしていきたいと思います

直江俊弐

私は大学山岳部出身ではありません。それ以前に、出身大学に山岳部が存在することを知ったのもつい最近です。そのような私が山歩きを始めたのは、知人と富士山に登ったこと、および仕事に関連してお世話になった方が山好きだったことによります。

詳細は省きますが、上記のきっかけで、山歩きを始めてしばらくの間、夏山を日帰りかつ単独で歩くのがメインでした。そんなある日、某百名山で弁当を広げて登山道を占拠する雲霞（うんか）のごときツアー登山者の群れに辟易し、人の少ない山を求めて雪山に登ることを考えました。基本から学びたいと思い登山教室を検索したところ、いかなる縁かＪＡＣの冬山入門教室がヒットしたために参加しました。

少なくともその当時は、ＪＡＣについてほとんど知らず（ハイグレードな団体というイメージは持っていました）、自分が入会するのが相当とは思っていませんでしたが、積極的に勧誘していただいたこと、なんらかの知識を得ることを期待できると考えたこと、それにこれも何かの縁だと考えたことから入会することにしました。

そのような訳ですので、ＪＡＣの末席を汚すことになりますが、これもひとつの縁ですので、多少なりともＪＡＣに貢献できればと思っています。

2007年、秋田県の白木峠で（左から２人目）

本格的な山登りに挑戦したいです

星　征雅

仙台出身で、現在は神奈川県逗子に在住の星征雅（まさのり）と申します。受験勉強の合間に図書館で見た渓流と高原の写真に魅せられて、大学でワンダーフォーゲル部の戸を叩いたのが20年前。在学中は仙台を拠点に、東北・北海道の沢、ヤブをフィールドに歩き回りました。山形との県境にある二口（ふたくち）の山々が私の登山の原風景ですが、やはり印象に残ったのは長期の合宿です。西表島縦断、知床岬までのヤブ縦走、中部日高の沢登り、白神の沢。積雪期には、飯豊・鳥海・蔵王・早池峰など。

就職で上京した直後に沢で滑落して入院生活を送ったうえに、ほとぼりも冷めないうちにバイクでも大ケガをしました。そのため、その後は自重して無雪期の縦走を主体に活動を続けてきましたが、次第に物足りない気持ちになってきていました。刺激を求めて、富士山に竹馬でチャレンジしたり、伊豆大島を一輪車で一周したりと遊んでいましたが、今回、大学および会社の大先輩である川俣俊一氏よりＪＡＣにお誘いいただき、改めて本格的に山に登り直したいと考え、入会しました。

入会後は青年部で活動的な方々と出会い、これまでやったことのなかったクライミングを始めました。今後は、沢や岩稜など、ひとりでは入りにくいエリアに行ける機会が増えることを願っています。そして、技術、時間、費用の制約はありますが、いつか海外の高峰にも登ってみたいと思っています。

2011年夏、北薬師岳にて

メモリアル

ワルテル・ボナッティを偲ぶ

芳賀孝郎

不滅の登山家ワルテル・ボナッティが9月14日亡くなられた知らせを、イタリア在住の友人谷泰氏（サルトロカンリ隊員・文化人類学者）から受け取った。享年81歳、ご冥福を祈る。

53年前、チョゴリザ初登頂を終えた1958年8月12日午前10時ころハイポーターに声をかけられて、ヒドンピークの方に目をこらすと、外国隊の4人がわれわれのベースキャンプに向かってくるのが見えた。軽い足取りで、ポールをついてモレーンを登ってくる。

小雪が降っていたが、双眼鏡でよく見ると彼らの服装は鮮やかである。グレーのチロルハットにグレーのニッカボッカ、えんじのセーターにえんじのストッキング、ショートスパッツに光った登山靴、セーターの胸にはイタリア国旗がついていた。

さっそく桑原隊長にイタリア隊の来訪を伝えると、隊長から全員に服装を整えるようにとの命令が出された。しかし、われわれには、イタリア隊のスタイルに相当する衣服はなく、紺のダウンジャケットを着るのみであった。

われわれ全員でイタリア隊4名を出迎えた。お互いにガッシャーブルムⅣ峰とチョゴリザの初登頂の成功を祝した。日本留学の経験があるフォスコ・マライーニが流暢な日本語で「日本のお茶とお菓子を所望する」と言ったのには驚いた。貴重な羊羹は隊長の指示で3ミリ以上に切ってはいけないことになっていたが、この時は特別10ミリに切られ、お茶とともにイタリア隊員にふるまった。

ハンサムなボナッティ（身長171チセン）の終始笑顔で控えめなしぐさが印象的であった。彼のどこに、K2での活躍、バルトロの難峰ガッシャーブルムⅣ峰の初登頂、ドリュ西壁などアルプスでの数々の記録的登攀の力が潜んでいるかと思った。彼の光った目の輝きともの静かな姿に強い魅力を感じた。

ヘルマン・ブールの友人である彼は、ブール夫人から日本隊がブールの遺品を見つけたかどうかを聞いてほしいとの依頼を受けていた。われわれが見つけたブールの遺品は、桑原隊長からボナッティの手に渡された。彼はブールを偲び、感慨深くお礼を述べていた。

会談の後、われわれはイタリア隊に歌をお願いした。4人の二部合唱で「大尉の遺言」と「フニクラフニクラ」を歌い、その声はバルトロの山々にこだました。お返しのわれわれの歌は「寮歌」と「デカンショ節」というお粗末さであった。

ボナッティは帰り際、モン・ブランの麓クールマイユールに住んでいるので、モン・ブランへ登りに来るようにと言ってモレーンを下っていった。

イタリア隊の帰った後、桑原隊長は隊員を集めてこれからの遠征隊は「国際的に服装にも気を使い、歌も二部合唱で歌えるようにしなければなー」と話した。

1998年10月1日、私は40年ぶりに東京のイタリア文化会館でボナッティと再会した。年をとったが、相変わらずハンサムで、格好いいのでボナッティであることがすぐにわかった。私はチョゴリザBCで撮った写真を差し上げた。古い昔の写真を見ながら、お互いの健康と若さを称えて硬い握手を交わした。

その時、彼の奥さまが映画『トロイのヘレン』主演の国際女優ロッサーナ・ポデスタであることを知った。結婚した動機について聞くと、彼女はボナッティの魅力にひかれて押しかけ女房であると笑って言っていた。彼はポデスタ夫人とともに富士山麓の私の友人宅へ宿泊したり、日本の風景、習慣など多くを経験して喜んでいた。

私はいつの日かイタリアへ行き、ボナッティ宅を訪問し、山に対する心境を聞きたいと思っていた。

2009年6月、イタリア在住の谷氏の案内でイタリアの旅をした。谷氏はボナッティ宅へ何回も連絡を取ってくれたが、残念なことに留守であった。私はトリノ山岳博物館の屋上からクールマイユールの彼方にあるモン・ブラン山群のアルプスを眺めて帰国した。

天国でボナッティは垂直を目指すのか、水平を歩くかを想像しながら彼を偲ぶ。

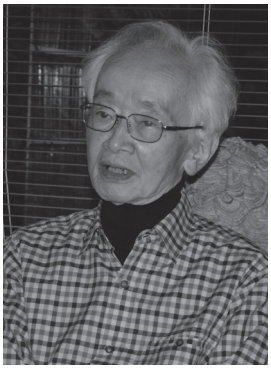
カルチャー

『北八ツ彷徨』の山口耀久さんと八ヶ岳

近藤　緑

緑爽会の例会で、甲斐大泉のロッジ山旅へ行く話が出たとき、すぐ「山口耀久さんを誘おう」と考えた。しばらくご無沙汰していたので、ご本人の体調もさることながら、久子夫人に先立たれてからの一人暮らしが気がかりでもあった。

山口さんとのご縁は、半世紀近く前にさかのぼる。夫が『アルプ』に小島烏水の評伝を連載していたころ、創文社のAさんが原稿をとりに来てくださっていた。約束の時間に見えても、筆の遅い夫のためにたいていは待たされることになった。そんなとき、茶飲み話に私がかつて戯曲を書いていたことを知ると、「散文を書いてみませんか」と勧めてくれた。串田孫一さんを中心とする『アルプ』は、格調高い雑誌で通っていた。恐る恐る書いた「常念の見える町」を推してくださったのが、編集同人の山口耀久さんだった。いま思うと、敗戦後結核で死んだ兄を追慕した私の文章を、同じ戦中派で闘病体験をもつ山口さんとしては無視するに忍びなかったのかもしれない。


八ヶ岳の想いを語る山口さん

さて、10月15日には、足が不自由な山口さんのために近くに住む山川陽一さんが車で迎えに行き、まるで拉致するかのようにして八ヶ岳に向かった。車の中で、山口さんの好きなオペラに水を向けると、話のきっかけを作った私が返事に窮するほどの博識ぶりだった。

その日の講演にしても山名の「八ヶ岳」の「八」は日本人にとって「聖なる数」だと言い、即座に「八咫（やた）の鏡」「八尺瓊（やさかに）の勾玉」、神武東征の八咫鴉、仏教の蓮華にちなんで芙蓉峰や高野八峰の話が次々に口をついて出てくる。岳人に人気の「霜つよし蓮華とひらく八ヶ岳」（前田普羅）の句ばかりは、いったいどこから見たのだろうと首を傾げる。山の歴史、山の地形、自然、そして先鋭的な登山技術、興味を持ったら、何でも徹底的に極めなければいられない性格なのだ。

山口さんが、富士見で療養したころに尾崎喜八と知り合い、それが人生の転機になったことは知られている。参加者から「尾崎喜八をどう思うか」と聞かれた山口さんは、戦争協力詩人とされた尾崎さんの孤独を説き、荷風・潤一郎のような耽美派は別として、真面目な詩人たちは斎藤茂吉も高村光太郎も戦争礼賛の詩をたくさん書いている。南京陥落の提灯行列をした国民に彼らを責められるかと、同情的だった。傍ら渡辺一夫と「腐儒瓦全」（腐った学者といわれても瓦としてまっとうする）を申し合わせて戦争に距離をおいてきた串田さんが、実は尾崎さんのファンだったことを伝えた。

商業主義の波が八ヶ岳に押し寄せてからの歯に衣着せぬ山口さんの毒舌には、地元で反感をもつ人も多い。「一人で山を歩かないほうがいいですよ」と心配した人もあったとか。

この日の集いは広く呼びかけることはしなかったが、それでも昔『北八ツ彷徨』を愛読した人たちで20人を越えた。その人たちには江戸っ子で真っ正直でひたむきな山口さんの人間性にふれる絶好のチャンスだっただろう。

次の日、飯盛山に向かう登山組と別れて「日野春アルプ美術館」を訪ねた後、旧知の原村のペンションで昼食をとった。ここのオーナーは信州大学大学院で哲学を専攻した自立心旺盛な女性である。是は是、非は非とはっきりモノを言うが、美人なのでわが亭主などはやりこめられて喜んでいる。山口さんともウマが合って、しばらくはカント、デカルト、ショーペンハウエルなどの名前が飛び交った。それを聞いていて思った。山口さんのような人を博覧強記と言うのではないかと。

そんな山口さんも、「富士見高原病院」を訪ねた時には、感慨深い面持ちだった。ここは「富士見高原療養所」の跡。後に結婚する川上久子さんと出会い、ともに尾崎喜八を訪ねた思い出の場所である。やさしく快活だった久子夫人が、林の中から出てきそうな気がした。

レポート

東日本大震災の義援金を被災会員、支部へ

宮崎紘一

東日本大震災の義援金（救援募金）の使途について検討してきた復興支援プロジェクトは、その配分素案を8月の常務理事会に提出し、同月の理事会で了承されるとともに金額の割り振りなどを一任された。会報『山』9月号の会務報告・審議事項で既報のとおりである。

これを受けて作業チームでは、被災各支部にお願いして正確で詳しい被災状況を把握し、具体的な配分額を決めて10月の理事会に報告した。

締め切りの6月10日までに集まった義援金は474万1162円である。287人の個人と、支部・同好会・同期会・中華民国の2登山協会など、合わせて16団体から義援金が寄せられた。

使途の大枠としては、①被災会員への見舞金　②被害が大きかった支部への復興支援見舞金　③日本赤十字社への寄託、以上の3つとした。

使途と金額は左記のとおり。

①被災会員見舞金

家屋全壊　3名　60万円
家屋半壊　10名　100万円
一部損壊等　19名　38万円

②被災支部復興支援見舞金

岩手・宮城・福島各支部　計81万6000円

③日本赤十字社へ寄託　190万円

④事務費・予備金　4万5162円

被災会員に対する見舞金

全壊、全焼、流出は20万円、半壊・半焼は10万円、一部損壊等は一律2万円とした。

家屋の被害の程度については、該当地域のおおやけの機関による報告を支部から届け出てもらった。

なお、会員個々に対する見舞金は被害の集中した3県に在住する会員には限らず、今回の大震災で一部損壊以上の被害を受けた会員を対象とした。茨城県在住の1会員が一部損壊に該当したが、辞退を申し出られた。また、被災申し出を遠慮した会員もいると聞いている。

この被災調査は、該当各支部に依頼したが、被災後の混乱期の調査にご苦労をかけてしまった。また、支部に所属していない被災会員の確認など思わぬ時間を費やした。

支部への見舞金

被害が集中した岩手、宮城、福島3支部に、会員数に応じて配分した。金額は一律で、年会費の3分の1に当たる4000円。対象人数は合わせて204人である。支部に一括して渡された見舞金については、当該支部の合意により、復旧・復興に資する諸活動に使うことができるものとした。

日本赤十字社への寄託

義援金のうち190万円を日赤に寄託した。災害の規模がかつてなく広域かつ甚大であり、JACの会員、支部だけでなく、被災地、被災者全体のために役立ててほしいという、かなりの数の会員の意向をくみ上げた。義援金総額のおよそ40パーセントに当たり、日赤には9月28日に送金した。

寄金者のなかには年度末の確定申告に当たって寄付金に対する所得控除を望む会員があり、金額の多寡に関わらず申し出られた会員と、3万円以上の寄付（募金）をしたすべての寄金者について、氏名・住所・金額をリストにして提出した。控除の申告に必要な日赤の証明書の発行は、数カ月要するとされ、一括して窓口のJACに届くことになっており、事務局から個々に郵送されることになろう。

11月1日現在、通信費や送金手数料を除き3万円余の予備金が手元にある。最終的な整理が終わってなお残金があれば、その分は日赤に寄託して配分業務を終えたい。

大震災の発生から8カ月になる。この間、被災地を訪れた会員は少なくないだろう。現地での救援活動に携わったボランティアから報告を聞くことも多かった。お疲れさまと言いたい。

現地へ行けないからせめてと募金に応じた会員も多かったと思う。復興支援プロジェクトは、被災地、被災者に寄せる思いを大切にと、もっとも有効かつ適正な使途を検討したつもりである。阪神・淡路大震災を経験した関西支部をはじめ、各支部から貴重なアドバイスをいただいた。

エクスペディション

ディディたちのマナスル

舟橋栄子

1956年5月9日12時30分、マナスル初登頂のニュースは、日本山岳会の快挙として、10日後には多くの新聞の一面に掲載されました。これが日本のヒマラヤ登山史の幕開けとなり、当時の若者たちはヒマラヤへの夢を膨らませたものでした。

ところが、あれから55年の歳月はマナスルの快挙を風化させて、マナスルがどこにあるかも知らず、ましてやヒマラヤの8000㍍峰14座の一つであることを知っている若者も少なくなりました。

今年の9月5日出発、40日間のAGマナスル公募隊（近藤謙司隊長）に参加して幸いにも登頂することができました。当時の記録を読みますと、隊員は全員男性でしたが、今回の公募隊の隊員は男性5人、女性4人のうち、登頂者は男性2人、女性3人で女性優位でした。当時、サマ村まで10日以上かかっていたトレッキングコースはネパールの首都カトマンズからヘリで1時間弱となりました。

最近は女性の社会進出がめざましく、パートではなく、常勤で働く女性も増えてきました。そして休みの日には、富士山など著名な山にあこがれて、山ガールと呼ばれる登山者が流行のファッションを身に着けて登山する姿を見かけることが多くなりました。今回の公募隊も男性は60歳の定年を迎えて当時の夢を果たしたいと参加してきていましたが、女性は70代の私を除いて40代50代のディディ（ネパール語でお姉さん）たちでした。彼女たちは、今までに経験した7000㍍の高度から、一足飛びに、ピッケルや登攀具、そして酸素ボンベの必要な8000㍍峰に登ろうというのです。

4年前の私もそうでした。7000㍍のアコンカグア登頂に有頂天になり、一気に標高8848㍍のエベレストを目指したのです。8000㍍峰の怖さも知らず公募隊に参加して8810㍍でみごとに敗退しました。頂上の見える位置に立ち、体が震え急に気持ちが萎えてしまいました。次回があると、自分に言い聞かせて下山したのですが、未だに、その機会はめぐってきていません。国際公募隊を主宰しているラッセル・ブライスに8000㍍峰のピークを踏むことを勧められました。山仲間からはビデオカメラを持たずに登るように助言されました。登山は、登頂によって目的が達せられたことが実感できるというのです。

今回は40代のディディたち2人が私と同じ10月5日に登頂できました。9月一杯は毎日雨か雪が降り、BC（4700㍍）からC2（6250㍍）までの高所順応しかできませんでした。モンスーンが明けたのは10月に入ってからでした。10月1日にC1（5500㍍）、2日にC2、3日にC3（6800㍍）、4日にC4（7450㍍）、そして5日午前3時過ぎにC4を出て、10㍍以上の強風のなか、最後の急坂を登りきり、頂上（8163㍍）に9時過ぎに到着しました。不思議なことに疲労は感じませんでした。ディディたちよりも時間はかかりましたが、登頂の際にこみ上げてくる喜びは筆舌に表わしがたいものがありました。マナスルはBCから上は雪道です。C2からC4にかけては迅速な行動が要求されるクレバスや数百メートルの急登が続きます。体力と持続力が必要です。

BCから先導してくれたサーダーのプラチリは、次はエベレストだ、と約束してくれました。日本山岳会の友人たちや、山の映像を制作している仲間たちも応援してくれ、12月4日には足利で、4月4日には東京の江戸博で、今回撮影したビデオを上映します。皆さまの期待に応えるためにも、さっそく、毎日のトレーニングを開始しました。

サマ集落から望むマナスル

連続講演会「語り継ぐ日本山岳会の歴史」第４回

一期一会・山と人――第二十代会長　大塚博美氏

羽田栄治

「会長シリーズ」講演会第４回は、第二十代会長・大塚博美氏をお迎えした。講演内容はＤＶＤに収録したが、ここに概略を報告する。

今回のテーマは「一期一会・山と人」。大塚氏はこれまでに出会った、忘れがたい「山の３人の諸先輩」について熱く語った。

ナンダ・コットと堀田さん

堀田さんといえば、ナンダ・コットに代表されるが、一世紀をまっとうした大先輩だった。彼こそが誰よりも勝る名リーダーである。リーダーには３つの点が求められるという。その３つとはつまり、「山」（山の選択）、「人」（隊員の選択）、「金」（資金の調達）である。

堀田さんは、先の３つの条件を完全に満たしていた。軍国主義へと突入した時代、なぜインド・ヒマラヤのナンダ・コットを選んだのだろうか。それは、まず入国できる国であったこと。次に、登山許可がもらえる山であったこと。そして、隊員の選択、資金の調達など……ヒマラヤ行きの計画が現実になっていった。その背景には堀田さんという存在が大きい。

堀田さんが亡くなられる前、久しぶりで堀田さんの避暑先である軽井沢を訪ねた。出会って開口一番にマナスルの話題だった。おそらく、堀田さんの意識のなかにずっとあったのは、登山ルートのこと、第２次隊でのサマ部落でのことだったのだろう。そして、サマ部落での出来事はアクシデントではなく、ハプニングであったということ。つまり、その土地の風俗、習慣などを熟知していなかった無知からくるものであって、それが日本隊にとって失敗の原因だったと語った。堀田さんにとってマナスルはなく、ナンダ・コットで終わったようだ。

松方さんに頼まれた日の丸

松方三郎さんは、槇さんと並んで人脈も教養もある最高の文化人だ。１９７０年、日本山岳会エベレスト登山では松方さんが隊長、私は登攀隊長を務め、中島道郎ドクターつきでベースキャンプ入りをした。

「一期一会・山と人」について熱く語る大塚氏

５月11日、松浦、植村の両隊員は、晴れわたった山頂に日の丸を打ち立てた。これで１億円はまかなえた。だが、山頂へ立ったものの遭難事故もあって登山は失敗だった。しかし、事業としては大成功だった。後援してくれた新聞社もテレビ局も万々歳であったから。エベレストの山頂に、松方さんから頼まれた日の丸を掲げ、登頂という約束を果たすことができた。

剰余金を生んだ三国友好登山

１９８０年、待望の中国登山が開放され、この年の５月、早くも日本山岳会隊がチョモランマの頂に立った。そして88年５月には、日・中・ネ三国友好登山が行なわれた。日本側の総隊長には今西寿雄さんが選ばれた。今西さんとはマナスル以来、縁があった。かつて山岳会で、今西会長時代は、私は副会長を務めた。また三国友好登山では今西さんは総隊長、私は副総隊長、お互いに気心の知れた関係であった。

三国友好登山は、なにしろ民族、風俗、習慣も異なる三国のこと、そのための「議定書」が交わされた。そして登頂日は５月５日と決められ、しかも山頂からテレビの生中継をするという。当初、異文化隊の危惧もあったが、事故もなく無事に壮挙を果たし、また山頂からのテレビ中継も大成功、記憶にある方も多いことだろう。

さらに、この登山は７０００万円の剰余金を生んだ。結果、山岳会では89年、海外登山の振興を図るため「海外登山基金委員会」を設けた。日本山岳会ならではの遠征登山であった。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

資料映像委員会――――

CDとDVDが寄贈

土橋進一会員より、『尾瀬の自然保護運動』、『武田久吉先生とメモリアルホール関連』のCDをご寄贈いただきました。このCDは、尾瀬の自然保護運動、武田先生とメモリアルホールの音声資料です。

舟橋栄子会員より、DVD『エベレスト街道』をご寄贈いただきました。このDVDは、平出和也さんと尾崎隆さんのインタビューを中心にまとめた作品。

いずれも貴重な資料として大切に保管し、また活用したいと思います。

（羽田栄治）

総務委員会――――

第43回新入会員オリエンテーション開催

10月1日、第43回新入会員オリエンテーションが日本山岳会104号室および会議室で開催された。今年の対象者は14790～14970番の181名で、最年長は79歳、最年少は宮城支部の12歳の中学生だった。今年は東海、越後、信濃、福島、栃木、静岡、埼玉、千葉、東京多摩支部などから36名の参加があった。昨年は参加者が19名と少なかったため、今回は紹介者に出席を促していただくようお願いしていたことが功を奏したようだ。

オリエンテーションは13時30分、高原総務担当常務理事の開会のあいさつで始まり、尾上会長が歓迎のことばを述べた。会長は日本の山の歴史、および日本山岳会の歴史を紹介し、率先して「クラブライフ」を楽しむようにとあいさつした。続いて総務担当の永田理事による、プロジェクターを使って、日本山岳会の会組織と活動全般にわたる説明があった。上高地山岳研究所、山岳保険の案内の後、記念写真の撮影を行なった。

事務局の前で、当日参加した新入会員の皆さん

休憩を交えて、新入会員の自己紹介と意見交換が行なわれた。司会進行は今田総務委員長。会員番号順に3分間のスピーチが始まった。さまざまな山歴、職歴の人が入会し、海外遠征経験者から、山登りを始めて2年という人まで実に多彩で、これから始まる「クラブライフ」に期待を抱いているようであった。今年の日本列島は、地震、台風、洪水、土砂災害、原発事故などで打ちひしがれた感があったが、福島や越後支部の会員は率先して山に登り、山から気力をもらい頑張っているように見えた。「ガン患者でも日本百名山は登れる」をテーマにしている竹永会員には、あと12座を頑張っていただきたい。

17時過ぎから始まった懇親会は、西村副会長のあいさつでスタート。司会は筆者が担当した。新入会員からはご自慢の地酒が次々に披露され、歓談の輪が広がった。同好会代表者からの同好会の紹介もあり、早くも入会した会員がいた。活発な情報交換がなされ、来年の山登りや、沢登りの約束まで聞こえてきて、大いに親睦を深めたようであった。なお、静岡支部の長田会員から「新入会員をよろしく、会員同士はみな繋がっている仲間。本日は有意義にお過ごしください」と、地酒とみかんをお送りいただいた。

18時半、出席者全員の力強い三三七拍子で、2011年度オリエンテーションは盛況のうちに幕を閉じた。

（岡田陽子）

集会委員会――――――

北アルプス最奥の高天原温泉と黒部川渓谷を楽しむ

会報『山』（6月・793号）の募集を見て、道産子の3人は「心踊り」すぐ申し込みをした。

それから3カ月後、紀伊半島に大きな被害をもたらした台風12号の長雨を心配しながら富山へと向かった。初日は快晴のもとJR富山駅より折立に向かい、これからの3泊4日の行程を思い描きながら薬師岳登山口の標識にタッチして入山した。

視界が開けると剱岳、立山の山並みが見え、眼前には薬師岳がその全容を見せてきた。太郎平では・薬師岳・水晶岳・黒部五郎岳など北アルプスがわれわれを迎えてくれた。この太郎平から薬師岳の往復は4時間半と聞き、一瞬「しまった」と思ったが、この先の山行を考えれば「山は逃げない、またおいで」と言う「山の声」が聞こえた。夜、星を見に出ると富山の町明かりが見えた。

2日目、太郎平小屋を6時に出て薬師沢に下り、長い木道を歩き薬師沢小屋に出た。赤い吊り橋で対岸へ、そして急なハシゴの登り・下りから黒部川本流沿いの「大東新道」へ入り、へつりB～Eの4つの沢を渡って高天原峠を越え、高天原山荘着14時であった。さっそく高天原温泉・カラマツの湯へ。露天風呂は男の特権とばかり気を使うこともなく、汗臭いシャツを脱ぎ捨て、熱めの湯に飛び込んだ。ビールを味わい、赤く火照った体を冷たい川の流れに浸し、「天然サウナ」を楽しんだ。

赤牛岳山頂で、喜びの参加者たち

3日目、5時「今日が本番」とのリーダーの声で出発。昨日の湯殿を経て、いくつもの徒渉を繰り返しながら沢を詰め、夏尾根に取り付いた。いよいよ温泉沢ノ頭への直登である。時間とともに高度が増し、傾斜もきつく息遣いが荒くなったが、朝日に朱色に染まった薬師岳がその辛さを忘れさせてくれた。9時40分、「頭」に着くと、槍ヶ岳が穂先を天に突き刺して遠くにあった。「いっぽん」でザックを降ろし、大パノラマの北アルプスを見渡した。すばらしい眺めである。これが「山」の楽しみである。来て良かった。

「あと6時間」のリーダーの声で腰を上げ、赤牛岳に向かう。山頂から黒部ダムが遠くに見えた。12時30分、赤牛岳からの下りが始まった。ガレ場の浮石に気を使い砂利に足をすくわれないように歩を進め読売新道の樹林帯に入った。「この道は登りには使わない」の声を何度か聞いて、17時、奥黒部ヒュッテに着く。このヒュッテの風呂に入った時は満足感でいっぱいだった。

最終日も晴れ。黒部川渓谷の壁面に吊られた丸太足場を渡り、「きついハシゴ」の登り・下りを凌いで平ノ渡し場は9時30分着。船待ちの40分は何とも心なごむひと時であった。10時35分、対岸に着き足を進めるも入り江は深く、しかもカンカン照り。皆が無口になり、耐えること4時間、黒部ダム堰堤着は15時15分であった。

天候に恵まれたが、それ以上に山仲間に恵まれた4日間であった。「来年はどこを……」の声も出て、笑顔の解散式となった。

帰宅後、長雨台風15号のニュースを見ながら、この紀行文を書いた。台風の間隙をぬった北アの4日間であったことを改めて感じた。台風被害が少しでも少なければと願うばかりだ。

（神埜和之）

図書紹介

『梅棹忠夫　未知への限りない情熱』

藍野裕之・著

2011年9月
山と溪谷社刊
四六判 512ページ
定価3360円

梅棹忠夫が生涯追求してきた、山登り、探検、学問について、著者・藍野裕之氏が1998年から2003年までの6年間に延べ20時間を超える取材でまとめた評伝である。

そのインタビューでとりあげたものは、梅棹の幼少期より現在にいたるまでの登山、探検、旅の経験を軸にした、生い立ち、深く関わった師、友人、先輩たちの回想である。本書の構成は十章からなる。

一章　京都　山城三十山
二章　三高山岳部　雪よ岩よ
三章　京都探検地理学会　最後の地図の空白部
四章　西北研究所　モンゴル遊牧民
五章　ヒマラヤ　マナスル登頂計画
六章　AACK　文明の生態史観
七章　東南アジア　カカボ・ラジ登頂計画
八章　京大人文研究所　アフリカとヨーロッパ
九章　日本万国博覧会　人類の進歩と調和
十章　国立民族学博物館　比較文明学

著者は本書の構成に関し、梅棹の自伝『行為と妄想―わたしの履歴書』をはじめ他の著作、その他の文献を参考にしている。「わたしの言葉よりも原文のほうが伝えられるものが大きい、と判断した箇所は原文を引用させていただいた。」とある。

梅棹が好奇心を野外に向けたのは小学生のころからで、中学生で登山を知り、次第に登山技術を向上させ、山岳学に生涯をかけようと考え始めた。しかし、紆余曲折があり、ワンダラーの心は探検や学術探査の道に進ませた。

その足跡は地球上の広範囲な地域におよび、梅棹はそれを「未知への限りない情熱」と述べて、これが本書の副題になっている。

著者は梅棹の人生に絡み合っていた人びとの物語も魅力的で、それぞれを主人公にしても遜色ない大物俳優がそろっていると述べる。梅棹の歩みを核に関連ある人物、たとえば今西錦司、川喜田二郎、木原均、桑原武夫、中尾佐助、西堀栄三郎たちの歩みを加えてまとめた。そこには日本の二十世紀がぴったりと入った。山、極地、砂漠、部族社会を巡り、独自の学問を立ち上げた知識人の一群を著者はみたのだ。

梅棹山脈を形成する行動派知識人たちの物語は、楽しく読めると同時に、巻末の引用・参考文献、人名索引は資料としてもきわめて貴重な本といえる。

（大橋　晋）

『北海道の登山史探求』

高澤光雄・著

2011年6月
北海道出版企画センター刊
新書判 252ページ
定価1260円

高澤光雄氏は、ほぼ40年にわたって北海道の登山史を発掘し、資料を収集してきた人で、その成果を北海道内外に発表し、著作にまとめてこられた。本書は、今まで発表したなかでも著者の思い入れの深い16編を選んでみたという（あとがき）。

冒頭の「登山の沿革」は、松前藩時代の探検から江戸末期のロシア人の登山、明治のお雇い外国人や北大の人たちによる近代登山の始まりと戦後のアルピニズム興隆までを通史として詳述している。

「アイヌ伝承の山」は、アイヌ語と山名、地名を論考し、「阿倍比羅夫の後方羊蹄遠征について」は、『日本書紀』や新井白石『蝦夷史』を引用し、松浦武四郎『後方羊蹄日誌』の登頂の真否を論ずる博覧強記ぶり。高澤氏には『羊蹄山登山史』の著書があるから羊蹄山の山名考証と登山史に力が入るのは

当然だ。

「北海道の出版文化史　山岳とスキー」は、明治初期の外国人による登山報告書や志賀重昂『日本風景論』、レルヒ少佐の手記、北大関係者による『山とスキー』の創刊時代から現在にいたるまでの北海道での山岳とスキー関連出版の華々しい歴史が語られている。「北海道における自殺山行三例」は昭和初期からの新聞記事から収集した「自殺行」の顛末記である。

本書は正統北海道登山史の深入り的論考と読み物的記事を織り交ぜたとおもわれる編集で、楽しみながら読み進める。

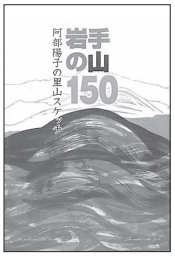
しかし、巻末の［資料］「板倉勝宣とアルペンツァイトゥング」と『山とスキー』について附『山と雪』」（両編とも総目次が収録されている）、また「『山日記』に掲載された戦前の山小屋―駅逓、営林巡視小屋をめぐって―」は、山岳・スキー誌から登山史をたどる資料として貴重であり、建設された山小屋を通じて登山の盛衰を知る資料としてユニークなものである。

コンパクトながら、本書は北海道の登山史を通して日本の近代登山の歴史が見えてくる内容である。

北海道登山史の探求と集大成に精魂を傾ける山書通・高澤氏ならではの好著である。**（松澤節夫）**

『岩手の山150　阿部陽子の里山スケッチ』

阿部陽子・著



2011年9月
ツーワンライフ刊
A5判 333㌻
定価1575円

岩手支部の会員、阿部陽子さんが、地元紙に6年にわたり連載した岩手の山150のスケッチを添えた紹介である。山にもその里にも地元の人ならではの、それにまつわるさまざまな物語があり、地図とともに載せてある。

私も花巻博物館の企画展「多田等観とチベットと花巻と」に立ち寄ったとき、多田等観が暮らした等観自筆の「一燈庵」という額のかかる庵を訪ねて江釣子山を知った。等観は昭和20年、弟が住職の花巻町・光徳寺に疎開後、湯口村の円万寺観音山に登り、花巻を一望できるその場所を気に入り、昭和22年「一燈庵」と名づけられた。その小さな庵に、彼の人柄にひかれた人たちによって建てられ光徳寺から移り住んだという。

日本各地で必ず出逢う慈覚大師にまつわる物語は、岩手県にもある。1372㍍の経塚山は、慈覚大師が経を納めたとされていて、天竺山と隣りあっている。中尊寺金色堂に詣でたあと、この小高い地から見渡す周辺の山も、束稲山を中心に美しいと著者はいう。

宮沢賢治の童話でおなじみの「なめとこ山」も、国土地理院2万5000分の1地図に記載されている（860㍍）。本州の最東端、宮古市の鮭ケ崎には、465㍍の鮭山がある。かつては鮭が波間に姿を見せたそうである。

岩手山や早池峰山に登ったとき、振り返ってそれぞれの山を展望したり、小さな温泉にひたったりする時にも、この本を参考に余裕のある山行をしたい。

今年10月15～16日、宮城支部主催全国支部懇談会で須川岳（栗駒山）に登るグループと、谷地湿原など巡るグループに分かれて行動した。後者のグループは2008年の岩手・宮城内陸地震の跡も見学した。駒の湯を襲った土石流ははるか上流の稜線直下から発生したものだ。復旧工事が進みつつあるとはいえ息をのむ思いだった。

そして今年3月、東日本大震災と、2回も大災害に見舞われている。

その後私は、10月に岩泉から宮古、田老の海岸を訪れた。すさまじく壊滅的な沿岸であったが、そこから続いている里山の緑がじつに生き生きと見えた。

地元の方々のご苦労を察しながら、山頂から見渡す岩手の山々に元気をもらいたいと思う。

（穴田雪江）

支部だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

北海道支部

オホーツク分水嶺第八区（藻琴山）をバスツアーで踏査

北海道支部が現在踏査を進めているオホーツク分水嶺（350キロ）のうち、第八区の藻琴山から小清水峠までの3・6キロを、40余名の会員会友が参加して、10月1日に踏破した。

当日は、早朝からの激しい雨のなかを、札幌から貸し切りバスで出発。東に進むにつれて天候が回復し、藻琴山登山口に着くころにはカラリと晴れあがり、今回目的の藻琴山がたおやかな姿を見せ、また眼下には青々とした屈斜路湖のカルデラの広がりも望める絶好の天気となった。札幌から380キロ、さすがに広い北海道。

登山道のある分水嶺を歩くA班には、会員会友である芳賀元副会長、千葉県や静岡県の会員も参加して賑わった。

登山道から分かれてハイマツの海を展望台（登山口）まで枝渡りしたB班、展望台から小清水峠までハイマツと深いクマザサを漕いだC班。3班に分かれて踏査した今回の分水嶺。それぞれが3時間の奮闘の末、出発点の登山口に無事集結して終了した。

夜は、屈斜路湖仁伏温泉のホテルで汗を流して疲れた身体を癒した。その後、当会の会員でもある弟子屈町在住の写真家・水越武氏からスライドを使って「レンズをとうして見た私の自然観」と題した講演を聞く。

続いて、支部長、推進委員長から今回の分水嶺の意義などに関するあいさつの後、待望の懇親会に移りビールで乾杯。

会員からは「ヤブ漕ぎがこんなに楽しいものだと思わなかった」などの意見が寄せられ、今後の分水嶺踏査への盛り上がりをみせ、弾みがついた。

翌日は、摩周「道の駅」で水越氏の写真展を鑑賞してから、辺計ヶ礼山（723メートル）を登山。紅葉が始まった秋晴れの山を満喫して全日程を終了した。

（京極紘一）

藻琴山登山口で3班が集結した

会務報告

平成23年度第7回(10月度)理事会議事録

日時　平成23年10月12日　19時より20時40分まで
場所　日本山岳会　会議室
【出席者】尾上会長、吉永・西村各副会長、高原・森・小林各常務理事、野沢・中山・永田・萩原・節田・志賀・古野・川瀬各理事、平井監事、宮崎・橋本各常任評議員
【欠席】浜崎監事

審議に先立ち会長から、「いよいよ10月24日に公益法人化の申請手続きに必要な書類を提出することになった。申請作業関係者（新法人移行PT等）の日頃の真摯な取り組みに対してあらためて謝意を表したい」とのあいさつがあった。

【審議事項】

1・公益法人認定移行申請の件（吉永、小林）

①移行認定申請書　②収支予算書（損益ベースの補正予算）　③事業会計別内訳書　④海外登山基金特定費用準備金の取り崩し計画(案)　⑤公益認定委員会の定款チェック　⑥組織図及び事業体系図　⑦理事及び監事に対する報酬　について説明があり、審議の結果承認された。（承認）

なお、特記事項は次の通り。

a・移行認定申請は10月24日に内閣府に提出し、来年3月20日前後に認定書類を交付され、4月1日以降公益法人発足を目指す。

b・収支予算書（損益ベースの補正予算）公益認定申請書類においては現預金の収支予算ではなく、正味財産増減計算による（損益ベースの）予算書を作成する必要があるので、減価償却費等を加えた所定の修正をおこなったものである。公益認定申請以降、つまり、平成24年度以降の予算は、公益会計基準（平成20年基準）を採用して損益ベースによる予算書を作成することになる。

2・補正予算の総会追認の件（高原）

前記1の②に関しては公益法人移行認定申請書類であり、公益認定等委員会に申請する時期との兼ね合いから、去る3月12日の総会で承認を得た23年度予算書を修・補正し今回の理事会承認を経て申請をするが、これを来年　3月に開催される総会に付議して総会の承認を得ることとする。（承認）

3・「山の日」制定プロジェクトメンバー委嘱の件（西村）

「山の日」制定プロジェクトメンバー表の発表があった。（承認）

役割	会員番号	氏名	備考
担当	7468	西村政晃副会長	新
リーダー	5839	成川隆顕	
メンバー	12660	藤本慶光	
〃	8637	江本嘉伸	
〃	5814	佐藤辰雄	新
〃	12319	永田弘太郎	
〃	8852	堀井昌子	
〃	11314	渡辺悌二	
〃	10636	染谷美佐子	新
〃	12946	山川陽一	
〃	13057	萩原浩司	
〃	14775	直江俊弐	新
〃	14966	藤山雄一郎	新

4・岳都・松本「山岳フォーラム」実行委員会参加の件（西村、萩原）

標記実行委員会事務局長より、11月20日、松本市で開催の同フォーラム実行委員会への参加要請があった。現在山岳5団体で推進中の「山の日」の機運を高める効果が期待できる。（承認）

5・實川欣伸会員（14228静岡支部）の会長特別表彰の件（高原）

同会員が昨年10月に富士山登頂1000回、そして今年9月に1111回を達成したことに対して会長特別表彰をする。（承認）

6・入会希望者の件（高原）

4名の入会希望者があった。（承認）

7・11月度理事会において「定款施行細則」の内、役員任期、役員年齢および終身会員について集中審議をすることが確認された。

【報告事項】

1・「高尾の森づくりの会」の位置づけ（吉永）

JACの傘下の一つの組織体として位置づけ（当面は常務理事会

直属）が合意・確認され、高尾の森づくりの会が受領する寄付金等の会計についてはＪＡＣと一体化した処理を行なう。

2・東日本大震災義援金使途（宮崎）

被災状況の調査が終了し、救援募金総額４７４万１１６２円についての取り扱いは以下の通りとなり、順次送金手配を実施している。

なお、9月30日をもって被災届けを締め切った。

①日本赤十字社寄託31件　１９０万円

②被災会員見舞金

・全壊3件、60万円

・半壊　10件、１００万円

・その他19件、38万円

（小計１９８万円）

③支部見舞金

・岩手支部81件、32万４０００円

・宮城支部52件、20万８０００円

・福島支部71件、28万４０００円

（小計81万６０００円）

④通信事務費　3万円

⑤予備費　1万５１６２円

（合計４７４万１１６２円）

3・職員1名退職にともなう事務局体制（高原）

事務局職員の荒井さんの退職（9月30日付）にともない、後任を検討していたが、3名（石光久仁子、今田明子、染谷美佐子）の会員を事務局支援員（交代勤務で有償）として、当面の間採用した。3人体制は今まで通りだが、皆さんの協力をお願いしたい。

4・平成24年度全国支部懇談会開催（高原）

第28回全国支部懇談会は千葉支部主催で行なう。今後の開催支部は2、3年先まで決定しておいた方が良いのではないかとの意見が出された。前向きに検討する。

5・福井支部創立20周年記念行事への出席（高原）

11月12日～13日、福井市で開催される。会長が出席する。

6・新入会員オリエンテーション報告（高原）

去る10月1日にルームで開催した。対象会員は１８１名で、内36名が参加し盛会であった。

7・谷川岳山岳資料館への図書寄贈（高原）

図書管理委員会から「山と高原地図」計67巻　昭文社（１９９９年版）他の寄贈予定本の報告があった。

8・神奈川大学クライミングウォールお披露目会（西村）

9月24日にお披露目会があり会長代理として西村副会長が出席した。

9・長谷川恒男カップ名義後援依頼（高原）

東京都山岳連盟および日本山岳耐久レース長谷川ＣＵＰ実行委員会から名義後援依頼があった。昨年通り後援する。

10・「第2回日本山岳遺産サミット」後援依頼（高原）

山と溪谷社・日本山岳遺産基金から11月3日開催の第2回日本山岳遺産サミットの後援依頼があった。後援をする。

11・尾瀬国立公園内の東京電力所有地の国有化実現要望書（高原）

7月度に引き続き同様の要望書がきた。ＪＡＣとして主旨は理解するものの、今後の推移を見守っていく。

12・英文ジャーナル（ＪＡＮ）発刊（高原）

8月下旬に『JAN Vol.12』が発刊された。

13・評議員会の開催（高原）

10月25日13時から開催する。

14・年次晩餐会の開催（高原）

12月3日、東京品川プリンスホテル・アネックスタワー5階で開催する。

15・ルーム内保管書類等の整備推進（高原）

書棚、書庫・ロッカー、部屋などに書類等が溜まり狭隘、見苦しい状況にある。書類等保存年数の策定・見直し、適正保存部数等合理的な基準作りと書類の整理等を担当の委員会に働きかけていただきたい。来年2月を目途に総棚淩えをしたいのでご協力をお願いしたい。

16・会報『山』10月号編集報告（神長）

ルーム日誌 10月

1日　新入会員オリエンテーション
3日　総務委員会　JAC-YOUTH
4日　図書委員会　スケッチクラブ
5日　集会委員会　みちのり山の会
6日　常務理事会　学生部　フォトビデオクラブ
11日　山岳研究所運営委員会　スキークラブ　九五会
12日　理事会　スケッチクラブ
休山会　山想倶楽部
13日　山の自然学研究会
山岳地理クラブ
17日　総務委員会　資料映像委員会　海外委員会
18日　スケッチクラブ　00会
19日　青年部　三水会　つくも会
20日　科学委員会　学生部
支部活性化PT
21日　秩父宮審査委員会　図書管理委員会
24日　JAC-YOUTH
25日　インターネット小委員会
ゆきわり会
26日　財務委員会　自然保護委員会　麗山会
27日　山遊会　01会

10月来室者501名

会員異動（10月）

物故

奥野幸道（7984）11・7・1

退会

望月福次（7736）静岡
高部正夫（9653）

小島烏水のレリーフ見つかる

『山』7月（796）号に「おたずね」の記事が出た「小島烏水レリーフ」が、発見された。10月1日、山研委員長の柴山信夫会員から、記事を投稿した砂田定夫会員にメールで連絡があった。山研管理人の内野さんが大掃除のとき物置のなかにあるレリーフを見つけ、会報を読んで当該品ではないか思い、柴山会員に伝えたという。

なお、詳報は、砂田会員が次号で報告の予定である。

図書受入報告（2011年10月）

著　者	書　　名	ページ/サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
R・ハンベリ・テニソン 編著	世界探検家列伝――海・河川・砂漠・極地、そして宇宙へ	304p/26cm	悠書館	2011	出版社寄贈
志水哲也	生きるために登ってきた	248p/20cm	みすず書房	2011	出版社寄贈
阿部陽子	岩手の山150――阿部陽子の里山スケッチ	333p/22cm	ツーワンライフ	2011	著者寄贈
佐藤　勉	懐かしき南会津――楽しき山と里	95p/21cm	歴史春秋出版	2011	著者寄贈
近藤光一	ぼくの仕事場は富士山です	171p/20cm	講談社	2011	著者寄贈
宇江敏勝	山人伝	181p/20cm	新宿書房	2011	出版社寄贈
村越　真	山岳読図大全（山岳大全シリーズ No.3）	258p/21cm	山と溪谷社	2011	出版社寄贈
平尾和雄	ヒマラヤ・スルジェ館物語	286p/20cm	講談社	1981	伊藤博夫氏寄贈

INFORMATION インフォメーション

◆山岳図書を語る夕べ――飯田年穂が語る『語りかける山』

図書委員会

11月に、飯田年穂著『語りかける山』が駿河台出版社から上梓されました。飯田氏は明治大学教授・同山岳部長。山と人と本のかかわりを縦糸に、ヨーロッパと日本の比較文化論を横糸に織りなす本書のエッセンスを、著者とブックデザインを担当した小泉弘氏に語ってもらいます。

日時　12月12日(月)18時30分より
会場　日本山岳会104号室
問合　三好まき子（TEL 090-8019-8601
✉344mm@mbe.nifty.com）

◆スキー懇親会

集会委員会

美味しい料理と畦地梅太郎版画ギャラリーで定評のあるペンションを拠点に、スケールの大きいゲレンデで懇親会を開催。現地集合解散。

期日　2012年1月15日(日)～17日(火)2泊3日
場所　白馬八方尾根
宿泊　白馬村みそら野「グローブインスカラ」
費用　2万1000円（宿泊・雑費他）
定員　30名
申込　12月10日までに、年齢、喫煙の有無を記入し、植木淑美（FAX 042-734-1498
✉yoshimi-denali@jcom.home.ne.jp）まで。

＊詳細はHPに掲載。申込者には詳細案内を送ります。

2011年晩餐会懇親山行

箱根山（神山～駒ケ岳）

富士山を間近かに望む箱根の最高峰、神山へチャーターバスとロープウェーを駆使して、晩餐会の翌日をコンパクトに楽しみませんか。

箱根一展望のよい駒ケ岳からブナに覆われた神山、噴煙を上げる大涌谷へとたどります。

日　時　平成23年12月4日(日)
定　員　90人
参加費　4,000円(バス代、その他)
振込先　三菱東京ＵＦＪ銀行　千駄木支店
　　普通　82829　日本山岳会集会委員会　大友裕美
集　合　ＪＲ品川駅　港南口（東口）　午前7時00分
解　散　ＪＲ小田原駅15時30分
　　及び　品川駅17時30分（予定）
行　程　品川駅═══首都高速、東名高速及び厚木道路、R1号、R75═══箱根園═══駒ヶ岳ロープウェー═══(7分)═══山頂駅……(0.20)……駒ヶ岳(1356ｍ)……(0.45)……広場(昼食)……神山(1437.9ｍ)……(60分)……大涌谷駐車場═══小田原駅═══品川駅(解散)
　　歩程　約2時間5分

＊雨天決行。
＊詳細は、参加申し込みの方にお知らせいたします。

さんけん通信

山研で委員会ミーティングを開催

山研運営委員会　柴山信夫

今回、初めての試みとして閉所作業に合わせ、山研で委員会ミーティングを開催しました。これは、毎月の委員会を市ヶ谷のルームで開催しているため、出席メンバーがほぼ首都圏在住者に限定されており、支部委員や管理人を交えた意見交換の場を設ける必要があることから、関係者が集まりやすい山研での開催となりました。

10月29日朝9時、担当理事2名と管理人を含め総勢20名が山研に集合、建物内清掃チーム、水周りチームおよび雪囲いチームの3チームに分かれ、秋空のもと手ぎわよく閉所作業をこなしました。

作業終了後のミーティングでは今年度の活動報告に始まり、山研利用アップ対策、指導委員会の山研拠点の遭難防止対策プロジェクト概要説明、管理人からの業務報告などが行なわれ、フリーディスカッションでは研究施設として、会員の宿泊施設として山研のあるべき姿を中心に活発な意見交換がなされました。

今後、来期の開所までに利用要領の一部改定を含め、会員がより使いやすい山研へ改善を進めていきますのでご期待ください。

なお今期は、諸般の都合により年末・年始の開所は中止としましたので、あらかじめご了承下さい。

大学山岳部の復活奮闘記――⑤希望

落合正治（神奈川大学山岳部　監督）

大学の創立80周年を祝う七大陸最高峰制覇夢計画が09年12月、ビンソン・マシフ登頂で幕を引いた。

世界最高峰チョモランマに「KU旗」を翻らせて見た新たなる目標とは、時空間を越えた未来の後輩達への熱いメッセージと夢の共有実践、まだ見ぬ彼方に広がる一筋の道を世代から世代へと襷をつないでいくことと信じてやまない。

われわれは大学が掲げた「創立100周年に向けての将来構想」を深く認識。そして魅力ある山岳部づくりとOB交友組織をつくるため、賛同者の総力を結集して未来の後輩達に夢を繋ぐプランとして「G&G計画（グレートサミッツ10峰とヒマラヤジャイアンツ14座制覇）」を、昨年末、創部80周年を機に立ち上げた。

山岳部100年ビジョン

◆山岳部と山岳会の理念

・マウンテニア・スピリットを錬磨し、志高く心身逞しい野外活動者と指導者を育成する。

・旺盛な探究心と挑戦意欲を育み、「文武両道」知識研鑽と気力充実・身体剛健、体力錬磨をめざす。

・最新登山技術習得と後進指導で相互向上を図る。

・競技スポーツ参戦で実績づくり。

・海外遠征でグローバルな視点を持った後継指導者を育成する。

◆山岳部と山岳会の基本方針

人格尊重、相互啓発「登山」という崇高な文化活動のなかで学び・育み・成長する過程を大切にし、最新登山技術を習得錬磨しつつより困難、高度な登山活動を通じて、優れた人間関係を醸成すると同時に、地球の環境保全活動に取り組んで有為な人材輩出を目標とする。

◆山岳部と山岳会の運営方針

・「より高きより困難に挑戦」する気概と情熱を漲らせ目標に邁進する気風をつくる。

・山岳部活動に賛同する支援組織を強化する。

・他大学山岳部との交流、切磋琢磨により同世代人として遜色ない見識を持った人づくりを図る。

・部員育成に取り組むための財政健全化を図る。

・「山の日」制定を山岳諸団体と連携して活動する。

新しい登山文化を発信

われわれは、登山、ハイキング、トレッキング、クライミング、トレイルラン、耐久レースなど日々進歩・進化、多様化する登山活動を日本の一つの登山文化として見すえ、一人ひとりがマウンテニア精神と建学精神をコラボレーションした登山観を持ち、自然環境保全と競技化したスポーツとしての幅広い山登りの文化を楽しみ、この活動を通じて切磋琢磨し、逞しい人間力のある人づくりをめざすクラブ運営へと進化発展できればと取り組んでいる。

東日本大震災の発生で延期されていた山岳部一〇〇年ビジョンの目玉「G&G計画」が7月末に始動し、第一弾のキナバル遠征は顧問、監督、学生でクリア、また8月には第二弾の欧州アルプス遠征でモン・ブランなどにしっかりKU旗を掲げて足跡を残した。

今後も大きく飛躍・飛翔するクラブづくりをと、OBをはじめ関係者一同胸膨らませている。（完）

❖編集後記❖

●ここ数年、登山界は「山ガール」ブームと言われ、若い人たちが山登りを楽しんでいる姿が多く見られるようになりました。日本山岳会でも、JAC-YOUTHの活動が功を奏し、若い新入会員が増えました。そのなかから7人の会員に、入会の動機と抱負を語ってもらいました。若い会員たちの、いいかたちでの「受け皿」になることも、日本山岳会の重要な役割だと思います。

●常々、感じていることですが、日本山岳会の財産は、「人」とそれを取り巻く「文化」「歴史」にあるのではないでしょうか。今月号は、特にそうした記事が続きました。先人たちから多くの「歴史」を学べる機会を、今後も作っていきたいと思います。

（神長幹雄）

日本山岳会会報　山　798号

2011年（平成23年）11月20日発行
発行所　社団法人日本山岳会
〒102－0081
東京都千代田区四番町5－4
サンビューハイツ四番町
TEL　東京(03)3261－4433
FAX　東京(03)3261－4441
発行者　日本山岳会会長　尾上昇
編集人　神長幹雄
E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp
印　刷　株式会社　双陽社